その幻想を

棒人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その幻想を

【Nコード】

N8598Z

【作者名】

棒人間

【あらすじ】

男が夢をみます。

少女がみせます。

そんなお話。

マッチ売りのちびっ子（前書き）

机にマッチ箱が有ったので思い付き連載。

数話で終る予定です。

マッチ売りのちびっ子

「おにたん、おにたん。」

薄暗くなり始めた通りに小さい子がいた。
迷子だろうか。

「君どうしたの？お母さんとかは？」

「んとね、おじいちゃんにおいてかれちゃったー。」

なんて酷い奴なんだ。
孫を捨てていくとは。

「でもねー、大丈夫なの。はい！これおにたんにあげる。」

マッチを1本貰った。

…んー、どうすれば良いんだろう。
とりあえず礼を言う。

「うん、お家帰ったらシュツてしてみてー。」

うんうん、シュツてするよー。

マッチを改めてしげしげと眺めた。

…これ先が黄色だけど大丈夫だよな？

一抹の不安を残したがポケットにしまった。

「あれ？おーいマッチの子ー？」

マッチの子も無いもんだと思ったが名前を訊いてないのでしょうがない。
マッチの子は跡形も無く居なかった。
まるで霞の様にふわりと消えていた。

このマッチは一体…。
先が黄色なのでかなり怖い。
西部劇なんかで柱とかにマッチを擦り付け、煙草に火を着ける場面なんか有るが、あれは黄リンと言って自然発火してしまう上猛毒という危険物なのだ。

「…着けてみるか。」

あんな小さい子がそんな危ないもの持つてる訳が無いという理由で着火。

理由になつてないとか知らない。

直後意識を失った。

理想の彼女とは(前書き)

キャラが…。

どうしてこうなった。

良かったらどうぞ。

次でおそらく終わります。

理想の彼女とは

ここどこだ？

病院だろうか。

誰かが救急車かなんか呼んでくれたのか？

意識はだいぶはつきりしている。

目を開けた。

「あ、目覚めた？大丈夫、ゆうくん？」

ゴキブリを遙か凌駕する素早さを瞬間的に発揮し布団から飛び出し、部屋の上隅に張り付いた。

人間ってすごい。

そう思った。

「わっ、ゆうくんそんな事出来るの？」

いや、あんた誰？

そう問うた次の瞬間苦手なものがやって来た。

「え…？ ゆうくんそんなの酷いよお…。」

泣かれたっ！

めっさ泣かれた！

とりあえずぶっ倒れたから記憶が…という事にしておいて目の前の女性から話しを聞く事に。

「ううっ…そうだったの？ ごめんね、ゆうくんの方が泣きたいよね。」

「私はゆうくんの彼女の篠本 優香しのまき ゆうかって言うの。ほんとのほんとに覚えてないの？」

残念ながら。

そう答えると篠本さんの目が潤み始めた。泣くのやめてくれー。

「あ、あーなんかお腹減ったなあ…？ そろそろご飯どきだしなあ…？」

「ふえっ？ わた、私っ、私作ってくるね！」

セフセフ。

はあ、なんだろう。

俺の理想に近い娘って言えばそうなんだよなあ。

なんか健気っぽいし、泣き虫で、ちよつと抜けてる感じ。ついでにかわいいし。

…怪し過ぎる。

これは絶対裏があるだろ。

本当に記憶喪失してるのかどうか分からないけど少なくともどっかに記憶が抜け落ちてるって場所は…多分無いし。

どちらにせよ今考えても分からない物は分からない。

「じゃん！ 今日はおうどんだよー。ちゆるって美味しいよ？」

なんにせよ居心地はそんなに悪くないし。
とりあえず美味そうなのきつねうどんを頂こうか。

マッチの正体

「明日、クリスマスイヴだからイルミネーション見にいこーよ。」

ちゆるっとうどんを食べ終え、まったりしていると篠原さんに言われた。

おー、こんなかわいい娘とデート…っておい。

今日は27日じゃないのか!?

「もー、ゆーくんぼけちゃったの?明日は24日だよ。」

カレンダーを確認すると今日は2011年12月23日となっていた。

あの黄色マッチは黄リンマッチじゃなく時間を少し戻せるのか?

でも1本で4日ってキリ悪いような。

うーん…。

「ゆーくんっ! 悩みごと?」

「うん、なんつーか…。いや、なんでもない。」

篠原さんは心配そうにしていたので、なるだけいつも通り振る舞ってベッドに入った。

そう言えばあのちびっ子は何処に行ったのだろう。

…でだ。

「ゆーくん…。ぬへへ。」

篠原さんは何故ここで寝ているのか。
いや、嬉しいよ？正直ね。
でも色々やばいでしょう。

ああ。

よし悟りを開こう。

皆、平等なのだ。

そう、男も女も関係無く。

隣に誰が寝ていようと関係無い。

だったら、ちよつと位胸触っても大丈夫なんじゃ…。

あかんっ！あかんよ！！それは！

どうやら邪な考

この後結局寝たのはお天道様がおはようございますする時間だった
という。

夜。

「えへへ、ゆーくんあったかい。」

「ちよっ、くつつき過ぎっ…恥ずかしいから！」

一日デートの帰り道。

篠原さんに振り回されて、色々な所をまわって買い物やらなにやらをした。

女性はこんな時に限って体力凄いな、とか思ったり。

楽しかったがやっぱり頭の中の引っかかりが気になって仕方がなかった。

あのちびっ子とマッチ。

あのマッチでやっぱり気絶して、頭を打って記憶喪失したのだろうか。

「今日ずっと上の空だったけどつまんなかったかな？」

見ると寂しそうにしている篠原さんがいた。

もちろんそんな事はない。

全力で否定。

「…そう？　ならよかったよ。」

あれ？俺また泣かすパターンか？

あたふたしてるのとしょんぼりコンビがしばらく歩いていたら。

居た。

マッチ売りのちびっ子。

無事だったのか。

いや、まだおじいさん見つからないとか。

「おにたん、おにたん。どうだった？たのしかった？」

デートの事か？

まさかずっとつけられてたのか？

「あ、その子…。」

篠原さん知ってるの！？

2人を見ていたら篠原さんは寂しそうにちびっ子にお辞儀した。ちびっ子はコクンと頷いた。

「あのね、今日はねお別れ良いに来たの！」

お別れ？

「うん、おじいちゃんがお迎えに来たの。」

それは良かった。

これで1つつつかえが取れた。

後1つあのマッチはなんなんだ？

「私からのプレゼント！おにたん寂しそうだったから…。」

ん？どういう意味だ？

寂しそうだったからあのマッチくれたのか？

「あ、そろそろ行かなきゃ。バイバイおにたん。」

「あ、おい。あのマッチはなんなんだー、ってもう行っちゃった。」

「ゆーくん…そろそろ時間だよ。」

え？

ああああ！！！！
そういう意味かこんちきしょー！！！！

目が覚めるとそこはいつもの自室で何かの燃え殻を片手に持ちながら床に倒れていた。

その日は泣き寝入りした。

窓の外には空を走る不思議な乗り物に乗った少女と髭を蓄えた老人が見えたと言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8598z/>

その幻想を

2011年12月28日01時52分発行